



一乗小だより

深く考える子
進んで取り組む子
思いやりのある子

福井市一乗小学校 第102号
令和8年3月9日発行
TEL 43-2024 FAX 43-2025
E-mail : itijo-e@fukui-city.ed.jp

卒業の日を迎えて

❀ ご卒業おめでとうございます ❀

「令和7年度第118回卒業証書授与式」が明日、行われます。6年生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして、保護者の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。さて、皆さんが小学校で過ごした6年間はどのようなものでしたか。皆さんが入学した令和2年は、ちょうど世の中がコロナ禍となり、学校が3ヶ月間お休みになった年です。入学式は5月終わりにあり、新学期は6月からでした。ようやく学校が始まっても、学校生活には様々な制限があり、マスク着用や給食も黙食でした。しかも、その年の夏休みや冬休みが短くなったり、秋休みがなかったりもしました。コロナ禍の生活が3年以上続いて、4年生の5月頃、ようやく今のような生活に戻っていきました。実に小学校生活の半分以上をコロナ対応で過ごし、我慢することが多かったと思います。



そんな中でも、一乗小学校のみんなは工夫をしながら、いろんな活動に取り組み、日々の生活を頑張っていたことはとても立派だったと思います。

今年度は6年生として、今までの上級生がやってきたことを引き継ぎ、学校全体のリーダーとして活動するようになりました。最高学年として全校の代表としての責任を感じながら、自分のことで精一杯になるときもあったと思いますが、どの活動も「みんなで取り組める」「みんなで楽しめる」ことを大切に取り組んできたことがよく伝わってきました。

4月からは中学生になりますが、一乗小で学んだことを活かして新しい環境で自分らしく、さらに成長して行ってほしいと思います。これからの健闘を祈っています。

明日の卒業を控えた6年生に、次のことを伝えておきたいと思います。ぜひ読んでください。

これからの時代を生きる皆さんへ

～ いろいろなことが新しくなる世の中を、どう歩んでいくか ～

1901年(明治34)1月2・3日の新聞に「20世紀の予言」と題した記事が掲載され、全部で23の予言が紹介されていました。その中の一つに、次のような文があります。

『写真電話 電話口には対話者の肖像現出するの装置あるべし』

これは「写真電話」、つまり話し相手の姿が見える電話が実現するという予言です。他にも、「人の声、十里に達す」という、電話の登場を示す予言もありました。日本で最初の公衆電話は1900年9月、東京の上野駅と新橋駅に設置されたもので、当時は今のように一家に一台どころか、気軽に使える時代ではありませんでした。写真電話が実際に公開されたのは1970年の大阪万博で、現在ではインターネットを使ったビデオ通話が当たり前になっています。

今から125年前の「23の予言」のうち、半分以上がすでに実現しており、未だ実現していないものは6つだけだそうです。当時の人々は、実現できるかどうか分からない未来を思い描きながらも、「必ず実現させたい」という強い願いをもって予言を発表したのでしょう。未来の電話を開発しようとした人たちの強い思いが、その後の技術発展につながっていったのだと思います。



1900年頃の電話

◆ 願いを実現する力について

Panasonicの創業者・松下幸之助氏は、次のように語っています。

「ここに大きな川があったとして、どうしても向こう岸へ渡りたい人は、泳いででも渡ろうとする。危険なら丸木舟を作るかもしれない。大勢いれば橋をかけることもあるだろう。しかし、願いが強くない人は“危ないからやめておこう”で終わってしまう。人間は、ほんとうに強く願ったことは、必ず実現できるのではないだろうか」

出典 PHP 総合研究所 『松下幸之助発言集41』(1978)

また、稲盛和夫氏(京セラ創業者)も「思いは必ず実現する。強く願えば」という言葉を残しています。その他、さまざまな分野で活躍する人々も、同じような思いを語っています。

◆ 6年生のみなさんへ

まもなく皆さんは中学校へ進み、さらにその先の未来へと進んでいきます。その中で、自分が実現したいことに向かって挑戦する場面がきっと訪れます。今まさに何かにチャレンジしている人もいるかもしれませんね。チャレンジには、不安や失敗を恐れる気持ちがついてくることもあります。

しかし、

「こうなりたい」「これを成し遂げたい」と強く願う気持ちこそが、道を開いていきます。

夢に向かって前向きに取り組む人生を、皆さんに歩んでいってほしいと願っています。これから会うさまざまなことを力に変えながら、自分の夢の実現に向かって、一生懸命がんばってください。

小学校の先生からもらったもの

先日、ある会報に載せる原稿をお願いされました。何を書こうかなど考えたとき、ふと思い浮かんだのは、私が小学生だったころの思い出でした。今は小学校の校長として働いていますが、教頭などの管理職になる前は、高校に1年、中学校に30年勤め、学級担任や全学年の音楽の授業、部活動の指導などをしてきました。

それなのに、どうして小学校のことを書こうと思ったのか――。

それは、子どもたちは大人になるまでいくつかの学校で過ごしますが、長い人生を生きるうえでの“土台”がつけられるのは、やっぱり小学校の時期だなあと、強く感じているからです。

自分の話で恐縮ですが、子どもたちには、今いる小学校でたくさん学び、たくさんの思い出をつくり、これからの人生の土台をしっかり育ててほしい…そんな願いがあります。その思いから、みなさんにお伝えしたいことを書いてみました。よかったら、読んでみてくださいね。

《小学校の先生からもらったもの》

今の自分があるのは、子どものころに通っていた小学校の先生との出会いがあったからだ強く思っています。教員になって中学校勤務一筋でしたが、初めての小学校勤務は管理職になってからです。自分は小学生の頃、多くの人に多くの迷惑をかけていたと思います。たくさん叱られたこともはっきりと覚えています。しかし、その頃に出会った先生は叱るだけではありませんでした。

小学生の頃、よく叱られた先生とのやりとりで特に記憶に残ることが3つあります。

1つ目は、決して日頃の行いが良くなかった自分が校内体育大会の応援団長に選ばれたとき先生が黙ってうなずいてくれたこと。その後、連体の応援団員も任されました。

2つ目は、算数のテストで不思議な解き方をしたのか、その答えをどのように導き出したのか説明を求められ、それをうなずきながら聞いてくれたこと。その解き方を理解しようと熱心に聞いてくれました。

3つ目は、連合音楽会の合奏練習で楽譜にないフレーズを勝手に作って吹いていたところ、呼び出しを受け、怒られると思っていたら発表でも吹くように言われたこと。しかし、この後、それまで楽しんで吹いていたのが、失敗できないと緊張して吹くことになりました。もしかすると、無責任に吹いていたように見え、責任を与えられたのかもしれない。

小学生の思い出は他にもありますが、1つ思うことは、当時の先生は自分の行いを否定することはなく、むしろ、認めてくれていたと思っています。この頃のことがあったからこそ、自らを否定することなく過ごすことができ、さらに、小学校で出会った音楽が今の自分やこれまでの人生に大きな影響を与えてくれたと思っています。

教員として今日まで勤めてきましたが、子どもたちが変わるきっかけが、毎日の生活のどこかにあるはずだと思いながら、今も仕事に向かっていきます。子どもを一人の人間として認め、その後の人生において自信をもって歩ませる、そう、その子がこれからの人生を歩んでいける土台をつくることに、小学校の先生は関わっているのです。先生の子どもたちに対するかわりがその子の人生を左右することがあるのです。



小学校での出会い

中学校や高校の先生に比べて、小学校の先生は子どもたちの進路に直接関わることは少ないと思いますが、その子のその後の人生に関わる可能性は同じようにあると思います。先生と子どもたちのつながり次の道へとつながっていく、そんな出会いであってほしいと思います。

..... 切り取り

学校へのご意見やご感想をお知らせください。

こちらからも可 →→→

Two empty rectangular boxes for writing a name and address.

年 名前

(無記名でも構いません)

